

■ 清流劇場「メディア」

古典に現代的テーマを見出し、意欲的に取り組む清流劇場が、古代ギリシア悲劇「メディア」を上演（10月20日、大阪市の一心寺シアター倶楽所見、エウリピデス原作、田中孝弥構成・演出）。

イオルコスの王子イアソン（西田政彦）のために弟を殺し、故郷を捨てたメディア（林英世）。彼と結婚後、王位争いの混乱で亡命。イアソンは苦勞をともした彼女を捨て、出世欲からコリントスの王女と結婚。メディアは夫が最も苦しむ復讐を考える。

装置をモダンなダイニングキッチンとし、現代にも通じる凄惨な家族殺しの物語として演出。冒頭はメディアがこわばった表情で子供の朝食を



林英世が聡明さと激しい怒りを同居させた主人公メディアを演じた

知性を超える怒り 活写

手際よく作り、無言で掃除する姿を描写。夫に出て行かれた屈託を表し、同時に本来の冷静な性格も伝わる。イアソンが来訪、何食わぬ顔で冷蔵庫から缶ビールを取り出す。調子のいい浮気夫のようだ。そして出国を促し、金は出すと言ふ。妻を見下す口調。辺境の地出身の異国人の彼女を、ギリシアの都会に導いたことを、恩着せがましく語り、差別意識も漂う。メディアの怒りは増幅、世継ぎを生むはずの新妻を殺し、さらに自分達の子も殺すことで、彼の血族の根絶やしを目論む。

林英世は土着性と聡明さを表現。復讐心が一時の狂気ではなく、罪を理解しながらも、知性を怒りが凌駕し、魔性と化す怖さを活写した。翻訳（丹下和彦）は今回のための新訳。現代口語に近く、聞き取りやすく、且つ品格がある。

ラストは、復讐を遂げたメディアの旅立ち。表情に喜びはない。罪を噛み締めつつ生きていく悲壮感が漂った。

日常に潜む怒りの炎。智を超える人間の本性を突いた。（大阪芸大短期大学教授